

# 村上春樹『レキシントンの幽霊』の本文異同

A textual criticism on MURAKAMI Haruki's *Ghost of Lexington*

沼尻 利通

Toshimichi NUMAJIRI

(福岡教育大学国語教育講座)

## 要 約

村上春樹『レキシントンの幽霊』は、「群像」に発表されたショート・バージョンと、単行本に収録されたロング・バージョンの2つがある。本稿では、現在までに確認できる各バージョンの異同を確認した。ロング・バージョンは、2003年発行の『村上春樹全作品1990～2000』（講談社）収録のものに訂正が確認できた。教科書に採用されているショート・バージョンは、大修館書店系統と三省堂系統の2つに大きく別れる。このうち三省堂系統は、これまで村上春樹作品では「僕」だった主人公が、「ぼく」とされている点に特徴がある。この変化は語り手を意識したものと考えることもできる。

キーワード：村上春樹 レキシントンの幽霊 本文系統 本文批評 教科書

## I. はじめに

村上春樹『レキシントンの幽霊』は、1996年10月に「群像」（第51巻第10号）に掲載されたものが初出である。それに併せるように、一ヶ月後の1996年11月に文藝春秋社から単行本として短編集『レキシントンの幽霊』が発行される。雑誌「群像」におさめられた『レキシントンの幽霊』と、単行本『レキシントンの幽霊』におさめられたものは、あらすじはほぼ同一ながらも、かなりの異同が認められる。この異同については、村上春樹は単行本の「あとがき」で、

ここに収められている『トニー滝谷』は長い方で、短いのは「文藝春秋短編小説館」というアンソロジーに収められている。『レキシントンの幽霊』も長い方の版で、短い方（おおよそ半分くらいの長さ）は『群像』の10月号に掲載されている。

(235頁)

と述べている。この「あとがき」で、自ら「短編小説を短くしたり、長くしたりすることに凝っていた」と発言していることからわかるように、村上春樹は雑誌発表した短編に手を加え、新たな作品に仕立てなおすことを頻繁にする作家である<sup>1)</sup>。『レキシントンの幽霊』も、「群像」で発表した作品（いわゆる、ショートバージョン）と、それに手を加えた単行本での作品（いわゆる、ロングバージョン）の2つが存在することになる<sup>2)</sup>。

この『レキシントンの幽霊』は、教科書に採用されている。教科書に採用された作品は、「群像」に発表さ

れた作品、すなわちショートバージョンを底本としているが、教科書採用にあたり、いくつかの異同が生まれている。教科書によって、『レキシントンの幽霊』のバリエーションが微妙に異なっているのである。

本稿では、『レキシントンの幽霊』の本文異同を中心に、その異同を整理し、そこから派生する問題点について触れていきたい。

## II. 系統の確認

村上春樹『レキシントンの幽霊』は、「群像」で発表されたショート・バージョンと、単行本で発表されたロング・バージョンの2つにおおきくバージョンがわかるが、それらがどのように系統づけられるかをまとめていきたい。まずはショート・バージョンのものから概観していく。ショート・バージョンの初出は、1996年10月に、「群像」に発表されたもの（【A】）である。このショート・バージョンは2001年11月の講談社刊行、講談社文芸文庫編『戦後短篇小説再発見6 変貌する都市』（【C】）という選集に収められている。またショート・バージョンは教科書に採用されている。1999年4月1日に大修館書店『精選現代文』（1998年3月15日検定済）（【D1】）におさめられて出版。2004年3月30日に三省堂『新編現代文』（2003年3月10日検定済）（【E1】）にも採用されている。すなわち、大修館書店、三省堂によって教科書教材として『レキシントンの幽霊』のショート・バージョンが採用されたことになる。つづいて、三省堂は、2008年3月30日出版の

『高等学校現代文〔改訂版〕』（2007年3月12日検定済）（【E 2】）においても採用している<sup>3)</sup>。一方、大修館書店は、2004年4月1日に『精選現代文』（2003年3月10日検定済）（【D 2】）、さらに改訂版の2008年4月1日『精選現代文 改訂版』（2007年3月12日検定済）（【D 3】）にも、『レキシントンの幽霊』を採用している。以上が、現在までのショート・バージョンにおける『レキシントンの幽霊』の系統である。

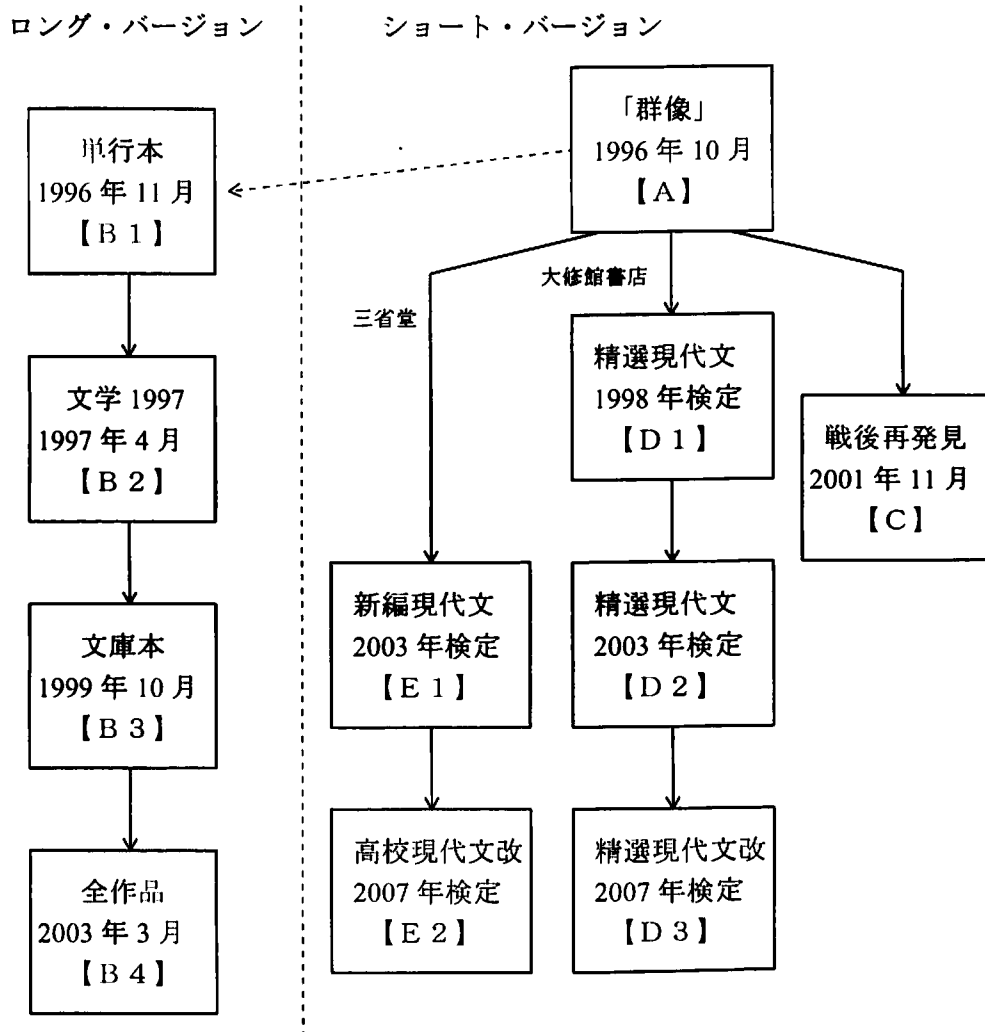
次に、『レキシントンの幽霊』のロング・バージョンの系統についても触れておく。ロング・バージョンは1996年11月に文藝春秋社より『レキシントンの幽霊』（【B 1】）という短編集の単行本におさめられ、その後、年度ごとのすぐれた短篇小説を集めた日本文藝家協会編『文学1997』（講談社 1997年）（【B 2】）に掲載される。さらに、文藝春秋社から文庫本の『レキシントンの幽霊』（【B 3】）が1999年10月に発行され、2003年3月、講談社の『村上春樹全作品1990～2000』第3巻 短編集Ⅱ（【B 4】）にも収載された。

これらの系統をまとめたものが、下の図になる。ロング・バージョンは1つの連なりとして認識できるが、

ショート・バージョンは3つに分岐する。その3つのうち、2つが、教科書に採用された大修館書店系統、三省堂系統に別れる、と考えるべきであろう。

ロング・バージョンの単行本版【B 1】、文学1997版【B 2】、文庫本版【B 3】、全作品版【B 4】を読み比べてみると、若干の異同が確認できる。

ロング・バージョンの初出にあたる単行本版【B 1】は、文学1997版【B 2】に再録される。この異同はほとんどないが、一箇所だけ「冷蔵庫からブリーチーズを出して」（傍点引用者、以下同じ。【B 1】20頁）が、「冷蔵庫からブリーチーズを出して」（【B 2】209頁）に訂正されている。この訂正は、文庫本版【B 3】、全作品版【B 4】にもなされており、文学1997版以後のものは、すべて「ブリー」となっている。また文学1997版【B 2】から文庫本版【B 3】では、一部の漢字にふりがながふられるようになった<sup>4)</sup>。本文は、先の「ブリー」に訂正した以外は手を加えてはいない。文庫本版【B 3】から全作品版【B 4】の異同はいくつか確認できる。文庫本版のふりがなに加えて、いくつかの漢字にふりがなを新たにふっている<sup>5)</sup>。



『レキシントンの幽霊』バージョンの系統図

また本文にもいくつか手が加えられている。

具体的に、文庫本版から全作品版に異同があるところを確認していきたい。「僕」がケイシーの家にはじめて訪れたさいの記述、「僕は四月の午後に緑色のフォルクスワーゲンに乗って、ひとりでその家まで行った。」(傍点引用者、以下同じ。【B 3】13頁)が、全作品版では、「僕は初秋の午後に緑色のフォルクスワーゲンに乗って、ひとりでその家まで行った。」(【B 4】14頁)となっている。またケイシーにはじめて会ったさいの印象を、文庫本には「ジョルジョ・アルマーニ風の小さな眼鏡をかけていた。とてもスマートだ。」(【B 3】14頁)とあるところが、全作品版では「ジョルジョ・アルマーニ風の小さな眼鏡をかけていた。スマートだ。」(【B 4】15頁)と、「とても」がなくなっているのである。半年後、「僕」がケイシーの家の留守番をすることになり、そのはじめの日の夜の、ケイシーの家の周囲の様子も、書き換えられている。「もっとも前の道路はどこにも通り抜けのできないいわゆる「ドライブ」だったから、行き来する車はあたりの住人のものに限られているし、」(【B 3】21頁)が、「もっとも前の道はどこにも通り抜けのできない道路だったから、行き来する車はあたりの住人のものに限られているし、」(【B 4】19頁)と訂正されている。「前の道路」を「前の道」とし、さらに「いわゆる「ドライブ」」が、「道路」と言い直されている。この「いわゆる「ドライブ」」の「ドライブ」は、英語では邸内の私道や車道を指す言葉である。

単行本、文学1977、文庫本の異同は、さほど重要な異同ではない。微調整とっていいレベルのものである。したがって、単行本版から文庫本にかけて、【B 1】から【B 2】【B 3】はほぼイコールで結んでしまってもかまわないだろう。単行本から文庫本への異同は、ふりがなの追加や字句の訂正レベルのもので、『レキシントンの幽霊』の物語世界の根幹にかかわるものではない。しかし、全作品の異同は見逃すことができない異同である。単行本の「僕は四月の午後に緑色のフォルクスワーゲンに乗って、ひとりでその家まで行った。」(13頁)は、全作品では「僕は初秋の午後に緑色のフォルクスワーゲンに乗って、ひとりでその家まで行った。」(14頁)に改められている。これは物語世界の時系列の整合性を整えるための改訂である。『レキシントンの幽霊』の作品世界では、「四月」に「僕」がケイシーの家にはじめて訪れたのでは、都合が悪いのである。「初秋」に訪れた設定でなければならないのだ。それでなければつじつまがあわなくなる。

『レキシントンの幽霊』では、「僕」がケイシーから手紙をもらい、ケイシーの持つジャズ・レコード・コレクションに惹かれて「僕」がレキシントンのケイシーの家に赴くことになる。「僕」はケイシーと知り合いとなり、「1月に一度は彼の家に遊びに行った」(【B 1】13頁)という親しい関係を築く。その後、「知り合っ

ら半年ばかりあとのことだが、僕は彼の家の留守番を頼まれた。」(【B 1】15頁)、そして「僕」は留守番を引き受ける。つまり、単行本版では「四月」、全作品版では「初秋」の「半年ばかりあと」に、「僕は彼の家の留守番を頼まれた」ことになるのである。この「僕」が留守番をしていた時期は、いつなのか。読みこんでいくと、それは「春」であることがわかる。留守番初日の翌朝の描写に「目を覚ましたとき、外では雨が降っていた。静かな細かい雨だった。地面をしめらせることを唯一の目的として降る、春の雨だ」(傍点引用者・【B 1】29頁・【B 4】25頁)と描かれており、季節が「春」であることがわかる。すなわち、単行本版の「四月」では、その「半年ばかりあと」に「僕」が留守番をしている季節が「春」となってしまう。これでは不整合が生じてしまう。もし単行本版の「四月」を訂正しないとすれば、「僕」が留守番をしていた時期を秋にする必要性が生じてしまうのだ。そのために、全作品では「僕」とケイシーの最初の出会いを「初秋」に改めたのである。「初秋」に出会い、その「半年ばかりあと」、すなわち春に、ケイシーが「僕」に留守番を頼んでくるということになり、何の問題もなくなる。

『レキシントンの幽霊』ロングバージョンの書き出しは、「これは数年前に実際に起こったことである。事情があつて、人物の名前だけは変えたけれど、それ以外は事実だ。」(【B 1】9頁)とある。のっけからこの小説は事実だと宣言している。そのため「僕」=村上春樹、であり、作品に展開される物語世界も「実際に起こったこと」と考えがちである。しかし、「実際に起こったこと」であるならば、季節を取り違えるはずがない。この作品は、頭の中で創られた虚構であり、リアリティを獲得するために、ことさらこのような書き出しを選びとったものだと考えるべきである。事実であることを志向する虚構でありながら、しかし虚構と言い切れないような、そういう事実と虚構の境界線上の曖昧な作品が『レキシントンの幽霊』なのである。この書き出しは「『すべてのクレタ人は嘘つきである』とクレタ人が言った」式の、パラドックスが含まれたものととらえるべきだろう。したがって、この作品の「僕」は、作者村上春樹個人を重ね合わされながらも、しかし微妙にずらされた存在としてとらえるべきなのである。

### III. ショート・バージョンの異同

次に、ショート・バージョンの異同について触れていきたい。ショート・バージョンは、初出の群像版【A】を頂点として、大きく3つの系統に分岐する。アンソロジーの『戦後短篇小説再発見6 変貌する都市』におさめられた、戦後再発見版【C】の系統と、大修館書店の教科書におさめられた系統(【D 1】から【D 3】の系統)、三省堂の教科書におさめられた系統(【E

1】から【E 2】の系統)である。三系統のうち2つが教科書の系統となる。結論から言うと、初出の群像版により忠実なのは、戦後再発見版【C】であり、教科書会社が発行する二系統には本文に手が加えられている。

教科書版の二系統の異同を検討する前に、群像版【A】と戦後再発見版【C】の異同を確認しておきたい。戦後再発見版は、初出の群像版を忠実に再掲載したもので、本文に手は加えられていない。ただし、いくつかの単語にふりがなが新たにふられている<sup>6)</sup>。ショート・バージョンの中では初出版にもっとも近いものが戦後再発見版であるといえる。

では、教科書版の二系統の異同はどのようなのだろうか。小説を教科書の教材にするさいに、教科書会社ではその小説の表記を改めることがよくある。とくに目につくものが、句読点である。教科書では、会話文のおわりに必ず句点を打っている。カギ括弧の「」の前に、必ず句点がうたれる。例えば、「こんにちは。」というように、教科書の会話文のおわりには、必ず句点がうたれているのである。これは、公文書の書式のルールとして決められたことを、教科書にあてはめているためだ<sup>7)</sup>。ところが、村上春樹は、基本的には会話文などのカギ括弧のおわりには、句点をうつ作家ではない。これは村上春樹だけが特異というわけではなく、そもそもジャーナリズムや文学の世界では、会話文や引用のさいに、いちいち句点をうつことはない<sup>8)</sup>。限られた字数で多くの情報を伝えようとするさいに句点が邪魔になるからである。したがって、村上春樹の作品を教科書教材にするさいには、カギ括弧の「」の括弧の前には句点がうたれなおされることになる。このケースの異同は、本文の体裁上のことであり重要ではないため本稿では触れない。

まずは、大修館書店系統の教科書の異同についてみていきたい。群像版【A】と精選現代文の1998年検定版【D 1】、精選現代文の2003年検定版【D 2】、精選現代文改訂版の2007年検定版【D 3】の共通の異同である。まず群像版と大修館書店の教科書の異同は、ふりがなが大幅にふられているところである。群像版にはふりがながふられていないが、教科書版には多くふりがながふられている。またふられている単語も、【D 1】【D 2】【D 3】ともに共通する漢字にふられており、異同はない<sup>9)</sup>。また、群像版では「いささか素気のない」(【A】182頁)とあるところが、大修館書店系統ではすべて「いささか素気のない」(傍点引用者・【D 1】39頁)とされている。またこれは大修館書店系統の教科書に特有の異同だが、群像版には「階段の下から楽しげな音楽が、蒸気のように廊下に浮かびあがってきた。」(傍点引用者・【A】183頁)とあるところを、大修館書店系統はすべて「階段の下から楽しげな音楽が蒸気のように廊下に浮かびあがってきた。」(【D 1】40頁)というように、「音楽が」と「蒸気の

ように」のあいだの読点を省いている。

教科書の異同は、その教科書の指導書を見ると指摘されていることがある。大修館書店の教科書の指導書にも、異同箇所が次のように指摘されている<sup>10)</sup>。

なお、本教科書所収にあたって、著者(村上春樹)自身の希望で以下の箇所に削除訂正が行われている。

P.43・下9「伏せられていた。」と「そこでパーティーが」の間を削除。原文(『群像』版)は「伏せられていた。クラッカーのかけらがコーヒーターブルの上に散らばっている。そこでパーティーが」となっている。

この箇所は、ケイシーの家の留守番を頼まれた最初の深夜に、主人公「僕」が幽霊たちのパーティーらしき物音を聞いた、その次の日の朝の居間の描写である。村上春樹は、群像版で「居間には乱れがなく、読みかけのガルシア・マルケスは、ソファの上に伏せられていた。クラッカーのかけらがコーヒーターブルの上に散らばっている。そこでパーティーが開かれた形跡はなかった。」(傍点引用者・【A】185頁)の傍点箇所を、大修館書店の教科書にするさいに「居間には乱れがなく、読みかけのガルシア・マルケスは、ソファの上に伏せられていた。そこでパーティーが開かれた形跡はなかった。」(【D 1】43頁)と削除したものである。これも大修館書店系統の教科書では共通してみられる異同である。

しかし、大修館書店系統の3つのもの——1998年検定版【D 1】、2003年検定版【D 2】、2007年検定版【D 3】——をくらべてみると、【D 1】【D 2】と【D 3】には異同がある。すなわち精選現代文が改訂版【D 3】を出したさいに、『レキシントンの幽霊』にも手が加えられているのである。具体的にみていこう。精選現代文の改訂前の【D 1】【D 2】では、「そうだ、レキシントンにいるのだ。タイムックスの腕時計を手さぐりで探して、青いグローをつけて時計を見た。」(傍点引用者、以下同じ・【D 1】39頁)となっている。しかし改訂版の2007年検定版では「そうだ、レキシントンにいるのだ。枕元に置いた腕時計を手さぐりで探して、ボタンを押して、青いグローをつけて時間を見た。」(【D 3】39頁)となっているのである。「タイムックスの腕時計」(【D 1】)が、「枕元に置いた腕時計」(【D 3】)とかわり、さらに「ボタンを押して、」(【D 3】)が付け加えられているのである。この新たな異同については、大修館書店はさほど意識していないようで、改訂版の指導資料にも異同の指摘はない上に、本文には見られないはずの「タイムックスの腕時計」についての注釈がなされている<sup>11)</sup>。

この「タイムックスの腕時計」をめぐる異同は、三省堂系統の教科書にもみられる現象である。三省堂は、2004年に出版した『新編現代文』(2003年検定)で『レキシントンの幽霊』ショート・バージョンを採

用している。そこでは、「そうだ、レキシントンに  
いるのだ。タイムックスの腕時計を手探りで探  
し当て、青いグローをつけて時計を見た。」(【E 1】183頁)とある。しかし、2008年出版の『高等学校現代文〔改訂版〕』

(2007年検定)では、「そうだ、レキシントンに  
いるのだ。枕元に置いた腕時計を手探りで探  
し当て、ボタンを押して、青いグローをつけて時間を見た。」(【E 2】151頁)と改められている。大修館書店系統では【D 1】  
【D 2】、三省堂系統では【E 1】が、「タイムックスの腕時計」であり、それ以後の【D 3】【E 2】がそ  
ろって「枕元に置いた腕時計」とされていること  
になる。大修館書店系統の【D 3】と三省堂系統の【E 2】は、ともに2007年3月12日に検定済となっている。2008年以降に出版された教科書は、すべて「枕元に置いた腕時計」という表現に置き換わっている。この異同は、どうも教科書の検定基準により発生したもののようだ。三省堂の2007年検定版『高等学校現代文〔改訂版〕』の指導書には、

「枕元に置いた腕時計を手探りで探し当て、ボタンを押して、」(151・12)は、原文の「タイムックスの腕時計を手さぐりで探しあて、」を、検定基準により、変更したもの。

としている<sup>12)</sup>。大修館書店系統も三省堂系統も、両方とも2007年の検定によって「枕元に置いた腕時計」と改変しているということは、おそらく2007年の検定のさいに、この箇所が検定基準によって改変されたと考  
えるべきであろう。

#### IV. 三省堂系統の異同

三省堂系統の教科書の異同について触れておきたい。結論から言うと、大修館書店系統の教科書は、初出の群像版【A】を——一部の改変や作者による削除があるとはいえ——かなり忠実に再現しようとしているのに対して、三省堂系統の教科書は、漢字をひらがな、あるいは逆にひらがなを漢字になおすなどの改変をおこなっている。当然、作者村上春樹の了解のもとにおこなっているはずであるから、これは正当な改変といえる。まずは、群像版【A】と新編現代文版【E 1】の違いを触れたい。三省堂系統も、大修館書店系統の教科書と同じく、漢字にふりがなをふっている<sup>13)</sup>。会話文のカギ括弧内の文章の終わりに句点を打つのも同様である。

こうした教科書に採用されるさいの特有の異同とは別に、語句の一部を変えているところがある。群像版で「犬はしかたなさそうに古い毛布の上に丸くなり、目をしばたかせた。」(【A】182頁)が、三省堂系統では「犬はしかたなさそうに古い毛布の上に丸くなり、目をしばたたかせた。」(傍点引用者・【E 1】183頁、【E 2】151頁)となっている。また群像版で「会話は渾然一体として、単語ひとつ識別できない。」(【A】

184頁)が、三省堂系統は「会話は渾然一体として、単語ひとつ識別できない。」(傍点引用者・【E 1】188頁・【E 2】155頁)としている。読点の異同もある。群像版では「僕はまだ十歳だった」、ケイシーはコーヒーカップを眺めながら言った。」(傍点引用者・【A】186頁)と、会話文と地の文の間に読点が打たれている。群像版と同じく大修館書店系統でも読点を打っている<sup>14)</sup>が、三省堂系統では「ぼくはまだ十歳だった。」ケイシーはコーヒーカップを眺めながら言った。」(【E 1】192頁、【E 2】159頁)のように読点が省略されている。

また、大修館書店系統にみられた「クラッカーのかけらがコーヒーテーブルの上に散らばっている。」の一文の削除はおこなわれていない。大修館書店の教科書に収載されるさいには、村上春樹はその一文の削除を希望したが、しかし三省堂の教科書に収載するさいには削除しなかったことになる。

以上のような違いのほかに、三省堂系統の教科書は、群像版とは趣が異なっているところがある。漢字をひらがな、あるいはひらがなを漢字に直すことを積極的におこなっているところが、三省堂系統の特徴である。次頁に「群像版と三省堂系統の語句異同一覧」を載せた。群像版ではひらがなであったものが、三省堂の教科書に採用されるさいに漢字になったもの、あるいは逆に群像版では漢字であったものが、教科書に採用されるさいにひらがなになっているものなどがある。具体例をあげると、群像版では「そのとき」(180頁)だったものが、三省堂系統では「その時」(【E 1】180頁、【E 2】148頁)と漢字に直されていたり、逆に群像版では「見事なコレクション」(181頁)と漢字だったものが、三省堂系統では「みごとなコレクション」(【E 1】181頁、【E 2】149頁)とひらがなに直されていたりするのである。このような例は86例があげられるが、このうち群像版がひらがなで、教科書版で漢字になったものは48例、逆に群像版で漢字だったものが、教科書でひらがなになったものは38例確認できる。パーセンテージにすると、前者が約56%、後者が約44%となる。このような異同は教科書としての体裁や、教科書に収載された他の作品とのかねあいなどから、異同が生まれるたと考えられる。したがって、やむをえない異同である。おそらく同じ教科書のほかの作品に「ぼく」とひらがな表記のものがあ  
り、一書としての統一をとるための異同なのだろう。ただし、文学作品には、漢字のものをひらがなにすることによって、あるいはひらがなで表現されていたものが漢字になることによって、表現の風合いが変わることがある。もちろん、それは教科書編集の意図や作者の意図を超えたものだ。

特に村上春樹の作品では、主人公が「僕」と1人称で語られているものがほとんどである。漢字の「僕」であって、ひらがなの「ぼく」では、少しくその表現



とがあるとするれば、それは文学作品の異同に配慮を払わない報告と言わざるをえない。文学作品はその享受とともに異同を生むものであって、それは教科書も同じなのである。

また、教育をめぐる『レキシントンの幽霊』の論考には、教科書版『レキシントンの幽霊』——すなわち、ショート・バージョン——のみの読みではなく、ロング・バージョンを補助的に用いて論が構築されているものが多い。教室で読まれているものはショート・バージョンのみであるはずなのに、そこに「ロング・バージョンにはこういう記述があるから、ここはこういう読み方をすべきだ」という指導方法では、正解主義的となってしまうだろう。教室で求められているのは、あくまでショート・バージョンの読みであり、ショート・バージョンのみでどこまで読み解けるかを考えるべきではないか。教科書の教材の作品は、ひとつの完結した作品として扱うべきである。『レキシントンの幽霊』ショート・バージョンの読解が、教室で読むことができないロング・バージョンとの比較を通じて展開されるのであれば、『レキシントンの幽霊』ショート・バージョンの達成した世界観を見失うことになりかねないだろう。教育現場では、ロング・バージョンとショート・バージョンはまったく別の作品として扱う覚悟が必要である。

もちろん、国語の指導方法は無限であるから、ロング・バージョンを提示したうえで、ロング・バージョンとショート・バージョンの比較検討により、どのように作品世界に広がり生まれるのかを検討する授業を否定するつもりはない。しかし、教室で教科書版『レキシントンの幽霊』を読むのであれば、ロング・バージョンとの併読ありきではなくして、提示された教科書版の精読こそがまず基礎となるべきであるはずだ。教室では、ショート・バージョンだけでどこまで読みこめるかが試されていると言えるのである。

## 注

- 1) 「書き換ええない作家と書き換えていく作家と大きく二分するとすれば、村上春樹は後者のタイプであるといえるだろう。」(山崎真紀子「はじめに」『村上春樹の本文改稿研究』若草書房 2008年 4頁)。
- 2) 「ショート・バージョン」という呼称は、村上春樹『レキシントンの幽霊』(講談社 1996年)単行本の巻末「初出一覧」に確認できる。「ロング・バージョン」という呼称は、青山南「ロング、それとも、ショート?—村上春樹『レキシントンの幽霊』」(『すばる』第19巻第5号(1997年3月号))が初出。その後、木股知史「『レキシントンの幽霊』論—村上春樹の短編技法」(『甲南大学紀要 文学編』第148号 2007年3月)により用いられ、定着している。本稿でも、初出の群像版を「ショート・バージョン」、単行本版を「ロング・バージョン」として用いた。なお、ショート・バージョンとロング・バージョンのそれぞれのバージョンでの異同については、中野和典「物語と記憶—村上春樹『レキシントンの幽霊』論—」(『九大日文』第13号 2009年3月)に大まかなまとめがなされている。
- 3) ちなみに、改訂前の『高等学校現代文』(2003年3月10日検定済・2004年3月発行)では、イタロ・カルヴィーノ『不揃いなサンダル』(和田忠彦訳)が採用されていた。
- 4) 文庫本版では、「上手く」(12頁)、「密やか」(30頁)、「距て」(36頁)というふりがなが新たにふられている。
- 5) 文庫本版に加えて、「臍臓痛」(16頁)、「涙みがち」(18頁)、「手の甲の皸」(27頁)、「サマードレスの裾」(28頁)、「窓の錠戸」(28頁)、「仮初めの世界」(29頁)、「微笑み」(30頁)に、新たにふりがながふられている。
- 6) 戦後再発見版では、「色褪せた絨毯」(ともに283頁)、「渾然一体」(288頁)、「手の甲の皸」(291頁)、「錠戸」(292頁)、「仮初めの世界」(293頁)とふりがながふられている。
- 7) 大類雅敏「句読法則」(『日本文学における句読法の研究』学人書房 1975年)など。
- 8) 大類雅敏「新聞・雑誌の句読法」(『日本語学』(明治書院)第8巻第6号(通巻第81号) 1989年6月号)。また野澤卓三「作家の会話文の表記について—国語教科書研究の延長として—」(『九州女子大学紀要 人文・社会科学編』第38巻第3号 2002年3月)の調査によれば、会話文の最後に句点をうつ作家は、13人であるのに対し、うたない作家は87人という結果だったという。
- 9) 精選現代文版【D1】で例示すると、「身体」(37頁)、「色褪せた絨毯」(39頁)、「古色蒼然」(39頁)、「匂い」(39頁)、「密やか」(39頁)、「馴染ませた」(39頁)、「誰か」(40頁)、「脇の下」(40頁)、「その類」(41頁)、「遙か昔」(41頁)、「鍵をかけて」(41頁)、「混み合っている」(42頁)、「渾然一体」(42頁)、「唾」(42頁)、「喉」(42頁)、「吠える」(43頁)、「嗅ぎ」(43頁)、「何故か」(43頁)、「暗闇」(44頁)、「嬉しそう」(44頁)、「手の甲の皸」(44頁)、「聡明な」(45頁)、「僅か」(45頁)、「呪い」(45頁)、「錠戸」(45頁)、「微かに」(45頁)、「権の実」(46頁)、「微笑み」(46頁)。
- 10) 『精選現代文(現文538)指導資料』(大修館書店 1999年 132頁)。なお、改訂版の『精選現代文改訂版(現文038)指導資料』(大修館書店 2008年改訂版 128頁)にも、同様の記述がある。
- 11) 『精選現代文改訂版(現文038)指導資料』(大修館書店 2008年改訂版 138頁)。
- 12) 『高等学校現代文改訂版指導資料』(7) [一部] 6

- 小説(2) 三省堂 2008年3月 129頁)。
- 13) 新編現代文版【E1】で例示すると、「身体」(180頁)、「色あせた絨毯」(183頁)、「古色蒼然」(183頁)、「鍵」(186頁)、「唾」(188頁)、「喉」(188頁)、「聡明」(192頁)、「呪い」(192頁)、「鐘戸」(192頁)、「椎の実」(193頁)。これらは高校現代文改訂版【E2】にも共通する。ただし、先に触れた【E2】の異同箇所「枕元に置いた腕時計」(【E2】151頁)には、新しくふりがながふられている。
- 14) 「僕はまだ十歳だった。」、ケイシーはコーヒークップを眺めながら言った。(榜点引用者・【D1】45頁、【D2】46頁、【D3】44頁)。なお、戦後再発見版【C】(291頁)の本文は群像版と同じ。
- 15) 「AERA」第12巻29号(通巻599号)、記事執筆者は浜田敬子。
- 16) 「非現実的な現実—村上春樹作品の〈2つの世界〉をめぐって」(「文学」(岩波書店)第8巻第1号 2007年1・2月号)。
- 17) 「単行本収録の際におおよそ2倍になっている」(岩崎文人「レキシントンの幽霊」『村上春樹作品研究事典』鼎書房 2001年 237頁)。なお、ロング・バージョンとショート・バージョンの比較検討は、佐野正俊「村上春樹における小説のバージョン・アップについて—「レキシントンの幽霊」の場合—」(「国文学 解釈と鑑賞」第73巻7号 2008年7月号)や、三省堂『新編現代文』の指導資料(『新編現代文指導資料』⑨ 二部 二小説 2004年。なお、同じ内容は『高等学校現代文改訂版』(2008年)の指導資料にも受け継がれている)に確認できる。